

東洋學藝雜誌第七號

明治十五年四月廿五日發兌

○理學ノ快樂

心理上ノ原理タル、人ノ意志ノ動作スルハ、快樂ヲ得ンカ爲ニアラサレハ必ス、痛苦ヲ避ケンカ爲ナルノ説ヲシテ信ナラシメハ、兒童ノ甘キヲ好ミ、壯士ノ色慾ニ耽リ、窮者ノ盜ミ、兇者ノ殺スモ亦自ラ銘々ノ之ニ由テ快樂ヲ得、若クハ痛苦ヲ避ケンカ爲ナル可シ、理學ニシテ已ニ之ヲ勉ムルモノアリ、又由テ得ル所ノ快樂、若クハ由テ避クル所ノ痛苦アルヤ必セリ、然レモ今兒童ノ甘キヲ嗜ミ、壯士ノ色慾ニ耽リテ、爲ニ快樂ヲ覺ユルカ如キ。一言スレハ皆是レ快樂タルニ外ナク、窮者ノ盜テ以テ其欠ヲ補ヒ、兇者ノ殺シテ以テ其怨ヲ晴スカ如キ、一言スレハ皆痛苦ヲ避クルニ外ナラサルヘケレハ、其結果關係等ニ於テハ、一個人或ハ數人ニ對スルニ於テ、將ニ大ナル差違アルハ、之レ余カ言ヲ俟タスシテ明カナル可シ、此等ノ原因結果關係ヲ尋究スルニ、甘ヲ好ムハ、身體感覺中何ナル緣由アリテ然ルカ、色慾ニ耽ルハ、身體情狀等ノ何ナル關係ニ由テ然ルカヲ檢定スルハ、決ノ無用ノ業ニアラサルヘシ、況ンヤ理

學ハ人ノ最モ尊重スル所ニシテ、其功ハ最モ顯著ナルモノナルニ於テオヤ、故ニ余ハコノニ理學ヲ勉ムルハ、何ナル理由アルニ發シ、由テ以テ得ル所ノ快樂ハ、何ナル種類ノモノナルカヲ論セントス、凡ソ有機物ハ、其生ヲ持センカ爲ニハ、必須ノ形狀ナカル可ラス、例ヘハ動物ヲ論セス、皆食セサル可ラサルカ如シ而シテ他仍ホ動物ニ必須ナルモ、植物ニ必須ナラサル者アリ動物ニ必須ナルモ、人類ニ必須ナラサル者アリ、動物ノ動キ、人類ノ衣ルカ如キ是レナリ、而シテ人類モ亦必ス、其必須ヲ同フセス、一般公衆ニ對シテハ必須ナルモ、他ノ一個人ニハ必須ナラサルアリ、政事法律ノ如キ、一社會ヲ保持センニハ、一日モ欠ク可ラサルモノト雖モ、純良ノ人ニハ、左マテ用ナキナリ、酒ヲ好ム者アリ、酒ヲ好マサルモノアリ、酒ヲ好ムモノニハ必須ニシテ、好マサルモノニハ必須ナラス、由是觀之人生一般ニ必須ナルモノト、人生一個人ニ必須ナル者ノ別アルカ如シ、其一般ニ必須ナルモノハ、之ヲ得サルキ痛苦ヲ來ストモ亦一般ナリ、一個人ニ必須ナルモノハ、之ヲ得サルキハ特ニ其人、或ハ其種ノ人ノ

ミニハ痛苦タルモ、未タ必スシモ其他ノ人ニ及ホサ、ル
 へシ、彼ノ乞食ニシテ食ヲ得ルハ快樂タルモ、王侯ニシテ
 之ヲ得ルハ、快樂トスルニ足ラサルヘシ、萬物相對ノ理ニ
 由テ然リ、今又一個人ニ必須ナルモノニシテ、他一個人ニ
 必須ナラサルノ例ヲ舉ケンニ、楠公港川ニ戰死シ、五右衛
 門四條河原ニ煮死ス、其死一ナリ、而シテ楠公ノ死ハ即チ楠
 公ニシテ止ムヲ得サルカ故ニ死セシナラン、是レ必須ニ
 シテ又必至ナリ、五右衛門ノ死モ亦止ヲ得サルニ出ツ、然
 レハコレ五右衛門ノ爲ニハ必至ナリト雖モ、決シテ必須
 ト云フ可ラス、何者五右衛門ヲシテ必至ナラシムルモノ
 ハ、法律上若クハ社會上ノ批准ノ然ラシムル所ニシテ、必
 須ト云フニ足ラス、故ニ其來ル所ノ痛苦ノ如キモ、亦以テ
 同一ナラサルカ如シ、暫ク看官ノ意見ニ任ス、然レハ外物
 ノ必至ハ必スシモ一身上ニ逼ラサルモ、心自ラ之カ形狀
 ヲ呈シ、人ヲシテ必至ナラシムルモノアルヤ明カナリ、
 前ニ掲クル所ノ二說、即チ人意ノ動作ハ快樂ヲ占メ、痛苦
 ヲ避ケンカ爲ナルノ原理ト、人ノ動作スルハ、必須ニ由ル
 ノ原理ヲシテ、誤謬ナキヲ得ハ、余ハコレヨリ本論ニ入ル

ヲ得ヘシ、夫レ理學ノ古今ニ進歩アリ、萬國ニ盛衰アルヲ
 看シハ、其決シテ一般ニ必須ナルモノニアラスシテ、一個
 人ニ必須ト成レルモノタルヤ明カナリ、之ヲシテ必須ト
 ナラシムルモノハ、心裡ニ必至ナラシムルノ形情アリテ
 然ルモ亦明カナリ、而シテ仍ホ人意ノ動作ハ快樂ヲ得、痛苦
 ヲ避ケンカ爲ナレハ、將ニ何ナル形情アリテ、其種ノ人ニ
 必須トナリ、必至トナルカヲ尋究セントス仰テ蒼天ヲ望
 メハ、無限ノ境中光々ノ球アリ、化シテ無數ノ小光トナル、
 遠近分タス大小定マラス、慈父孝子ノ愛、節婦美夫ノ娛、命
 脈一度ヒ絶ヘテ、死灰タモ止メス、起テハ、無算ノ事物ヲ見
 寢テハ無狀ノ境ニ遊ブ、斯ノ如キノ感、豈ニ夫レ人心ヲ動
 カサスシテ止マンヤ、畏死ノ念愛生ノ情、常ニ人生ノ不安
 ヲ嘆シテ、之カ痛苦ヲ去ラントス、痛苦ヲ去ルハ快樂ヲ増
 スナリ、コレ理學者ノ由テ起ル所以ナリ、然レモ人ニ情ア
 リ、意アリ、肉慾アレハ、情慾アリ、然ルニ生活ニ必須ナル
 モノヲ得サレハ、又此痛苦ヲ去ラントスルニ力ナケレハ、
 理學ノ起ルヤ、幾分カ社會ノ進達ヲ待テ、而シテ後之ニ及フ
 ヤ必セリ、

凡ソ人ノ快樂トスル所ノモノハ、之ヲ得ントスルニ、必ス爲ニ備フル所ノ資ナカル可ラス、例ヘハ酒ヲ嗜ムモノ、花柳ニ遊フモノ、皆之ニ供ス可キ資力ヲ有セサル可カス、夫レ然リ限リアルノ財ヲ以テ、限リナキノ慾海ニ投セハ、遂ニ失望ノ底ニ達セサルモノハ、蓋シ一人モナカル可シ、況ンヤ人生ノ常トシテ、屢スレハ益其度ノ前ニ倍セソコト願フモノナレハ、無分別ナル壯年輩ヲ除クノ外ハ、特ニ身体上ノ快樂ヲ以テ、一生ノ良計トナサス、又爲スヲ得サルナリ、今ヤ一步ヲ進メテ特ニ身体上ノ快樂ニ止マラス、人生ノ業務トナレルモノ、快樂ヲ見ルニ、商業ト云ヒ、政務ト云ヒ、人ノ最モ欲望スル所ノ快樂、即チ富貴名望ノ如キ、之ヲ以テ一生ノ目的トスルキハ、或ハ幸ニ之ヲ占領スルヲ得テ、其幸福最モ大ナル可キモ、顧ミテ其結果方向ヲ考フレハ、頗ル不穩ナルモノアリ、

單ニ二三ノ例ヲ舉ケテ之ヲ論センニ、古今宇宙間ニ一國ノ政事ヲ指揮シ、或ハ大業ヲ仕遂ルモノ、始ヨリ其目的トセシコトヲ貫クモノ幾許カアル、一刃ノ向フ所、豪傑モ仍ホ其銳ヲ避クル能ハス、一少婦ノ甘言、能ク巨萬ノ富ヲ流シ

去ル、天然ノ勢力ハ人之ヲ免カル、ヲ得ス、況ンヤ人生ノ事業ノ如キ、毎ニ其目的ニ合スルノ時ハ、今日ヲ去ル幾億年ナルモ、仍ホ未タ之レ有ルベキノ期ヲ云ヒ難キオヤ、故ニ余ハ今斷言シテ、社會上ノ名譽ヲ望ムハ、平穩ノ業ニアラストス、

余ハ今一步ヲ進メテ富貴、權力、名譽ヲ以テ快樂トスルノ不穩ナルノミナラス、慈善、博愛ヲ稱シテ、或ハ愛國ヲ主張シ、或ハ敬神ヲ稱揚スルモノト雖モ、仍ホ全ク其功德ノ純ナラサルヲ説カントス、曰某ノ所業ハ、以テ國權ヲ擴張スルニ足ル、曰某ノ説ハ、眞ニ上帝ノ命スル所ナリト、自ラ信シテ疑ハサル人ハ其之ヲ主張シテ、其信徒ヲ増加シ得ハ、之ニ由テ得ル所ノ快樂モ、亦大ナル可シト雖モ、何セン自家之ヲ信シテ、最善、最良ノコトナリトスルモ、世ニ處シテ必スシモ、最善、最良ナラサルコトアリ、自由ヲ主張シテ、却テ他人ノ自由ヲ害シ、宗教ノ仁惠ヲ主張シテ、却テ獨立ノ人ヲ傷フカ如キ是レナリ、況ンヤ世間慈善、博愛ヲ稱スルモノモ、往々私慾ヲ以テ成ルノ害アルニ於テオヤ、

今理學ニ從事シテ、得ル所ノ快樂ヲ看ルニ、大ニ前ニ論ス

ル所ノモノト異ナリ、蓋シ理學モ之ヲ樂マントスルニ、幾許カ之カ資力ヲ有セサル可ラス、是レ併シナカラ、他ノ諸業ノ如ク、有形ノ資力ニアラスシテ、全ク心上即チ無形ノ資力ナリ、加之理學者ノ求ムル所ノ資料ノ如キ、道路仍ホ克ク之ヲ供シ、塵芥モ亦之ヲ備フ其他山川、草木、禽獸、蟲蟲ノ類ニ至ルマテ、往クトシテ其資アラサルナキ、是レ其資ニ乏シカラサル所以ナリ、

由是觀之理學者タラントスルモノハ、生活ニ必須ナル物ノ外、他ニ多ク要スルモノナキカ如シ、否ナ多ク財ヲ有スレハ、必スヤ之ヲ保持スルカ爲ニ、幾許カ其心身ヲ檢束サルハ、至ルヲ以テ、却テ心ノ繁ヲナス、故ニコレヲ有スルハ、特ニ必要ナラサルノミナラス、理學者ノ爲ニハ無用ノ長物タリ、

又理學ニ從事スルモノ、外形ニ依頼スルノ點ニ就テ其不定ナル、夫ノ名譽、富貴等ヲ欲望スルモノ、形狀ニ比シテ、其如何ヲ論セシ、凡ソ萬物天然ノ通法ニ由テ、左右セラル可キハ論ナシ、故ニ余ハ理學者ニモ、仍ホ生活上必須ナルモノヲ、辭スル能ハサルヲヲ説ケリ、此他理學ヲ勉メ

ントスルニ、今日ニシテ他ニ之ヲ制スルモノ、止ムヲ得サルモノアリヤ、曰是レアリ、我心力ノ不充分ナルト、自然ニ人力ノ達シ得サル所ノモノ是レナリ、假令ハ順序ヲ逐ハスシテ、直ニ諸學ノ蘊奧ヲ究メントシ、身ハ地球上ニアリテ、氣外別世界ヲ實視セントスルカ如キ是レナリ、而シテ其コ、ニ達スルヲ得サルヲ以テ、理學ノ快樂ハ、不充分ナリト云ハンカ、決シテ然ラス、數學中定則ノ一二ヲ考定シ、心理上通法ノ一端ヲ窺フモ、既ニ理學ノ初步ニシテ、真理ノ一ヲ得ルナリ、而シテ學ヲ究ムルナリ、思フテ限リナク之ヲ悟レハ彌々深ク、之ヲ慮レハ益大ナル、是レ蓋シ理學ノ快樂ノ、樂テ盡ス、好テ倦マサル所以ニシテ、然モ少ク其理ニ通スルヲ得レハ、其資ノ往ク所トシテ、有ラサルナキ所以ナリ、然レハ始メ其首端ヲ得ルニハ、幾許カ他人ノ爲ニ制セラル、所ナキニアラサルモ、少ク歩ヲ進ムルニ於テハ、獨立不羈ニメ、敢テ夫ノ政事家、事務家等ノ常ニ人ニ由テ、變遷極ナキカ如クナラス、已ニ變遷極ナキカ如キヲナキヲ得ルニ及ンテ、心始メテ安ク、茲ニ創メテ一個人ヲ爲スヲ得ルモノナリ、

昔シ妄教虐政ノ盛ナル時、人未ダ理性ニ乏ク、偶々獨立不羈ノ眞男子ヲ出スヲアルモ、特ニ人外ノ形狀ノ人ヲノ、其志ヲ完カラシメサルノミナラス、又人事ノ檢束ニ由テ、遂ニ理學ノ犠牲トナリシモノ少ナカラス、而シテ其志ノ堅固ナル、或ハ無慘ノ壓抑ヲ被リテ、徒ニ今世人ノ爲ニ推尊セラル、ニ止マリ、或ハ隱レテ世ニ出ス、死後漸ク其理說ヲ現スカ如キヲ思ヘハ、亦慘然タラスンハアラス、余ヤ今日千九百年代ノ世界（僅ニ開明ト稱スルモノ、ミヲ云フ）ハ、人智然マテ進メリトセス、道義未ダ高キトモ思ハサルモ、仍ホ前ノ如キ惡風ヲ見サルハ、實ニ衆人ト共ニ喜ハサル可カラサル所ナリ、然ラハ今ノ時ニ方リテ快樂ノ永カラントヲ欲シ、其確實ナルヲ願フモノハ、理學ヲ置キテ、又何ヲカ求ムヘキ、

次ニ自家之ヲ信シテ、而シテ他ニ之ヲ強ユル所謂愛國者、敬神者ノ如キ、素ヨリ其心志ノ充分誠實ナルモ、仍ホ其不變不異ノ定理ヲ豫定スルニ於テ、他人ヲ害スルカ如キ憂ヒハ理學者ニモ、亦免カレサルモノナリヤ否ヲ、論辯ス可シ、夫レ理學者タルモノハ、其目的トスル所、特ニ理ノアル

所ヲ究メ、敢テコレニ由テ結果シ來ル所ノ事情ニ由ラス、故ニ唯理コレ、求メテ、敢テ自家、若クハ人ノ爲ニスル所ナクシテ、眞ノ理學者タルヲ得可シ、然レハ今理學者ノ指ス所、即チ天ノ通法トスル所ノモノヲ論スルニ方リ、讀者未ダ心中ニ、充分其意ヲ解スルノ資力ナクシテ、之ヲ實際ニ施シ、大ニ世ノ不穩ヲ惹起スヲナキニアラサルハ、理學モ前ノ二義ト異ナルナシトセンカ、之レニ事ヲ混スルモノナリ、其理ヲ究メ事ヲ驗スル、之ヲ理ヲ學フト云フ一ナリ、其眞トシ假定セルモノヲ、著ハシテ世ニ公ニスル、之ヲ理ヲ人ニ通セントスルモノト云フ、二ナリ、其理ヲ究ハムルノ快樂タル、敢テ罪ナキナリ、其理ヲ公ニスルニ方リ、其理果シテ理ナレハ、又罪ナキナリ、他ノ之ヲ學ンテ、一身ヲ誤ルカ如キ、之レ理ノ罪ニアラス、不理ノ罪ナリ、思フテコレニ至ラハ夫ノ某ノ行ヲ以テ、世ヲ益スルト稱シ、某ノ行ハ、爲サ、ル可ラストスルカ如キハ、既ニコレヲ實行スルノ、不可ナルヲ知ルニ足ランカ、

余ハ己ニ理學ヲ樂ムト、之ヲ著ハシテ樂トスルノ、別アルヲヲ表シタレトモ、仍ホ一例ヲ擧ゲテ、之ヲ示サンニ、ニユ―

トシカ重力ノ理ヲ發見セルハ、コレ其業ニシテ、其快樂タルヤ理學ノ快樂タリ、今之ヲ究メ終ルノ後、其書ヲ燒キ、之ヲ究ムルノ資トナレルモノヲ捨テハ、ニユートンニシテ理學ヨリ得ルノ快樂ヲ減センカ、否ナニユートンニシテ減セサルモ、コレニ由テ將ニ受クヘキ廣益ヲ、世界ニ授ケサルノ毀アランノミ

○羅馬字ヲ以テ日本語ヲ綴ルノ說

東京大學理學部教授 矢田部良吉

我邦現今用フル所ノ文字ハ之ヲ學フヲ甚タ難ク、之ヲ運用スルヲ亦易カラサルハ、吾人ノ熟知スル所ナリ、夫レ西洋諸國ノ兒童ハ僅ニ其文字ヲ綴ルヲ學知スレハ、日常ノ文書ヲ認メ得ルト雖モ、我邦ノ兒童ハ小學ニ在テハ、三四年間刻苦勉勵ストモ、未タ簡易ノ書狀タモ、充分ニ書クヲ能ハアルハ、毎ニ父兄タルモノ、歎息スル所ナリ、日本ノ文字ハ此ノ如ク難キヲ以テ、其學生ハ貴重ナル時日ヲ空シク、讀書綴文ニ費シテ、實地ノ學識ヲ得ルヲ甚遅シ、豈慨歎ニ堪ユベケンヤ、然レモ今我邦文字ノ難キハ、我邦ノ不幸ニシテ又如何トモス可カラスト云テ、之ヲ放棄

スルハ、是レ愛國心ニ乏シキモノト爲サ、ルヲ得ス、苟クモ今日日本ニ生レ、幸ニ文明諸國ノ學術ヲ収得シ、世道進歩ノ尙フヘキヲ知ル人ハ、宜ク此ニ注意シ、已レカ一個ノ譽望ト便利トヲ捨テ、我後昆ノ爲メニ、萬世享福ノ長計ヲ慮ラサル可カラサルナリ、

然ラハ之ヲ爲スヲ如何、曰ク我國ノ文字ヲ改良シ、我國ノ子弟ヲシテ、後來理學ニマレ、哲學ニマレ、其欲スル所ヲ研究スルニ易カラシメ、隨テ我邦ノ智力ヲ發達セシムルニ在リ、但シ其方法ノ如キハ、余左ノ數節ニ於テ簡畧ニ説明スルアラントス、

我邦ノ文字即チ支那ヨリ借リ來リテ數百年來通用スル文字ハ、英語ニ所謂「アイデオグラフィ」即チ思想ノ記號ニシテ、音聲ヲ表示スルモノニアラス、夫レ支那ノ如ク一言ヲ以テ一語ト爲ス國語ニ於テハ、音數ニ限リアルカ故ニ、夥多ノ文字即チ思想ノ記號ヲ以テ、之ヲ補フハ實ニ止ムヲ得サルト雖モ、我國語ハ大ニ之ニ異ナリテ、固ヨリ一音ノ語ナキニ非スト雖モ、二音以上ヲ連合シテ一語ヲ成スモノ甚タ多キハ、寧ロ歐洲諸國ノ語ニ幾シトス、故ニ我邦ニ

於テハ支那ノ如キ、不都合千萬ノ文字ヲ用ヒスシテ歐洲ノ如キ音聲ヲ表示スル文字ヲ用フルコソ適當トハ云フヘケレ、然レモ日本ニ於テ漢字ヲ用フルハ、因襲コ、ニ久シク、既ニ全國ニ普及スル所ナレバ、今之ヲ廢スレバ、不便ヲ覺ユルコト少ナカラサルハ勿論ナリ、況ンヤ其學問ハ、文字ト共ニ支那ヨリ輸入シタルモノナレバ、凡ソ我邦古今ノ書、大半其文字ヲ用ヒ、其思想ヲ借ラサルモノナシ、實ニ我カ舊來開化ノ精神ハ、支那ノ精神ト同一ナリト云フモ、過言ト爲ス可カラズ、嗚呼除カント欲シテ除キ難キハ、人心ノ舊習ニ過ルハナシ、今ヤ日本人ノ腦髓ニ浸染セル漢字ヲ廢セントスルハ、非常ノ事ニシテ、輕卒ニ企及シ、容易ニ成功ス可キニ非スト雖モ、然レモ眞ニ我邦ノ歐洲諸邦ト互ニ開化ノ域ニ馳騁セシムルヲ熱望セハ、決シテ斯ノ如キ姑息ニ安ンヌ可キニ非ス、斷然志ヲ決シテ、之カ改良ヲ謀ラサル可カラサルナリ、

夫レ既ニ漢字ハ廢セサル可カラストセハ、何ヲ以テ之ニ換ヘンカ、或曰ク、日本ニ假名ナルモノアリ、是レ本ト漢字ヨリ出ツト雖モ、日本人ノ創制セシモノニシテ、日本ノ言語

ヲ表示スルニ甚タ適當ナルノミナラス、襲用既ニ久シクレハ、專ラ之ヲ通スルモ亦易シト、是レ一理ナキニ非ス、余モ嘗テ之ヲ考究シ、少シク試ミシコトモアレモ、假名ハ其用法ニ種々ノ習慣アリテ、學者ハ貴重スト雖モ、常人ノ目ニハ甚タ錯雜ナルモノニシテ、縦ヒ之ヲ變ストモ、其宜シキヲ得ルニ難カラシ、且夫レ假名ノ甚タ不完全ナルヤ、日本語ヲ綴ルニモ、時トシテハ甚ダ奇ナル連接ヲ爲サ、ル可カラズ、且近來西洋ノ學術益々我國ニ入り、隨テ洋語ヲ用ヒサルヲ得サルニ方リテハ、到底之ヲ以テ充分ノ綴合セヨ爲ス能ハサルハ論ヲ俟タサルナリ、蓋シ假名ハ、子音ト母音トヲ混合シタルモノニテ、素ト人ノ音聲ヲ精密ニ分析シテ作りタルモノニ非レハ、常ニ變化上進スル所ノ言語ヲ表示スルニ適セサルハ、少シク言語學ヲ講究セル人ハ、明ニ了知スル所ナルヘシ、

或ハ曰ク日本語ハ甚タ不完全ニシテ、文明國ノ精密高尚ナル、思想ヲ表示スルニ足ラサルカ故ニ、寧ロ全ク之ヲ廢シテ、方今地球上ニ最モ弘通スル、英語ヲ用ユルヲ便ナリトスト、此論較宜シ、然レモ亦言フ可ク、行フ能ハザル

モノナリ、
夫レ國語ノ成ルヤ一朝一夕ニ非ス、風土人情ニ隨テ同シ
カラス、開化ノ高卑ト種類トニ隨テ異ナルモノニシテ、猶
英語ハ英人ニ適シ、佛語ハ佛人ニ適シ、支那語ハ支那人ニ
適スルカ如シ、一例ヲ舉テ之ヲ明カニセシニ、歐洲ニ於テ
ハ、輒近盛ニ啞聾學校ヲ設ケ、啞聾ノ子弟ヲ教ヘテ、其唇舌
ノ運用ニ由リ、常人ト談話スヘカヲシム、然ルニ其南方ニ
生ル、モノハ、南方ノ方言ヲ表シ、其北方ニ生ル、モノハ
北方ノ方言ヲ顯ハスト云フ、抑啞聾ノ人ハ、他人ノ音聲ハ
勿論、自己ノ音聲ヲモ聞クヘキニアラサレトモ、其發音ニ專
ラ自己生地ノ方言ヲ表スル所以ハ、蓋シ父祖ヨリ遺傳セ
ル形質ノ遂ニ天性トナルニ由ルナルヘシ、土地人情ニ因
テ言語ノ變ス可ラサルコト此ノ如キモノナリ、去レハ又近
來日本ニ英語ヲ學フ人多ク之ニ熟スル者ニ至リテハ、其
言其文共ニ殆ト英人ヲ欺クニ至ルト聞ク、然レモ一語中、
音聲ノ強弱、若クハ冠詞、前置詞、助動詞等ヲ用フルコト全
然、英人ニ異ナラサルモノハ、幾許モアルヘカラス、外國
語ヲ學フノ難キコト以テ知ル可シ、然レハ英語ヲ廣ク日本

ニ用フルヲ善トスル説ノ如キハ、其妄ナルコト辨ヲ俟タサ
ルナリ、
既己ニ漢字、假名、英語皆ナ用フ可ラストセハ、果シテ何ヲ
用フレハ可ナランヤ、余以爲ク羅馬字ヲ用フルニ若クハ
無シ、夫レ羅馬字ハ、方今文明諸國ノ共通スル所ニシテ子
音ト母音トヲ分析シテ作りタルモノナルカ故ニ、人ノ音
聲ヲ表示スルコト甚タ自在ナリ、其用法各國ニ於テ小異ナ
キニアラスト雖モ、其大意ハ皆ナ一轍ナリ、此レヲ取テ日
本語ヲ綴ルキハ、後來我文字ノ、文明世界ニ普通スルノ便
ヲ得ルノミナラス、近來盛ニ西洋ヨリ移シ來ル、諸學術上
ノ語ヲ翻譯スル如キ、難事ヲモ避ルコトヲ得ヘシ、蓋シ學語
翻譯ノ事業タルヤ、啻ニ至難ナルノミナラス、縱ヒ之ヲ爲
スモ、精力ヲ費スホドノ益ハナキモノナリ、曷ソ原語ヲ用
フルノ簡易ニシテ、便利ナルニ若カンヤ、且夫レ西洋人ノ
思想活潑ニシテ、其著書ノ精ニ入り、微ヲ析キ、論理ノ明瞭
ナルハ、少シク洋學ニ志ス人ノ能ク知ル所ナリ、是レ果シ
テ何ニ由ルソ、固ヨリ天稟ト教育トニ由ルヘシト雖モ、亦
文學ノ簡單ニシテ、思想ヲ表示スルノ容易ナルニ、原因セ

スノハアラス、我邦人ハ支那ノ文字、及ヒ言語ノ爲ニ進歩セシト多シト雖モ、亦其東縛壓制ヲ受ルコト少ナカラス、而シテ因襲ノ久キ、遂ニ之ニ安ンシテ、己レカ新思想、新言論ヲ發揮スルノ自由ヲ奪ハレシヲ知ラサルコト、猶長ク奴隸タリシ人カ、舊ニ甘ンノ、其身心ノ自由ナキヲ知ラサルカコトシ、習慣ノ人心ヲ箝制スル亦甚シト謂フ可シ、然レモ日本人ニシテ、一旦此ノ自ラ招ク、東縛壓制ヲ離脱シ、簡便ナル羅馬字ヲ用ヒ、以テ其言語ヲ表スルニ至レハ、新思想、新言論、ハ是ヨリ縱横自在ヲ得ルニ至リ、遂ニ西洋諸國ト共ニ、開化ノ域ニ進ムヲ得ヘシ

(未完)

○日本陸地肉食動物ノ散布 博士アラウンス述

左ノ一篇ハ獨逸國博士ダビツド、ブラウンズ氏、曩ニ東京大學理學部地質學教授タリシトキ、東洋學藝雜誌ノ發兌ヲ賞賛シ、祝文ニ代ヘテ寄贈セラレタルモノナレハ、譯シテ以テ左ニ掲ク、

譯者識

予ハ今此問題ヲ論辯スルニ當リ、日本陸地ニ産出セル哺乳動物ニ付、一言セント欲スル所ノモノアルナリ、抑日本ニ産出スル哺乳動物ハ其數至テ僅少ナレモ、或動

物學者カ凡テ陸地ニ生息セル、此種類ノ動物ハ、現時亞米利加ニ存在セル種族ノ滅縮セシモノニ過ス、ト明言セシ如キ微々タルモノニ非ル可シ、尤モ兩國ニ散布セル此種族ハ、東方亞細亞、及ヒ北亞米利加ニ繁殖セルモノト、同一ノ種族タルヤ予モ亦疑フ容レサルナリ、

諸動物ノ分布セシ原因ヲ探究スルニ、其現出ノ多少ニ關ラス漂積時期ニ生存セシ動物ト比較シ、コレカ証ヲ立ルハ實ニ緊要ノコトナレモ、日本ニ於テハコレヲ爲スハ無用ノコトナル可シ、何者動物ハ凡テ古北冰洋地ノ種族ヨリ分類セシ目標アリテ、多クハ類似ノモノヲ産シ、或ハ全ク同種類ノモノヲ生スルコトアレハナリ、

本論ノ主旨ニアラサレハ、陸地ニ發育セル他ノ哺乳動物ニツキ明解ヲナサス、予ハ詳細ニ肉食動物ノミヲ説明セントス、然レモ現今ニ至ルマテ、日本ニ於テハ漂積時期ニ屬セル此種ノ動物ハ、痕跡タモ見ル能ハサレハ、予ハ只管現時ノ種族ヲ研究シ、コレカ辯明ヲナサントス、此他地上ニ分布セルモノハ、其原種ヲ搜索スルニ便ナル種々ノ根據トス可キ、特別ノ性質ヲ有スルノミナラス、唯二種ヲ除

ク外ハ、人爲ヲ以テ他邦ヨリ誘導シテ、内地ニ生殖セシメタル徵候ナシ

肉食動物中、インセクチボラ食蟲族ハ未タ其位地明瞭ナラサレハ之ヲ除

キ、海産肉食動物即チビノニペギア(海豹ノ類 Otaria Stell-

On.ノ如キ)ハ論及スルヲ要セス、故ヲ以テ予ハ陸地産出ノ

モノニノミ注目セシニ、甚タ奇異ニ且要用ナル事項ヲ見

出セリ、是レ即チ日本諸島、及近傍ノ小島中、フェリナ猫族ノ存在ヲ

見サルコトス、唯對馬島ニ山猫ノ一種ヲ産セリ、而シテ予

モ此動物ノ棲息セシコトハ、嘗テ聞知セシコトアリシカ、明治

十四年勸業博覽會ノ列品中剝製ノ標本ヲ見、始メテ親シ

ク觀察スルヲ得タリ、然レモ其標本倭少ニシテ、充分ノ點

檢ヲナス能ハサリシカモ、今其大畧ヲ記スレハ、褐色ニシ

テ薄キ黝色ヲ帶ヒ、黑色十字形ノ班紋アリ、尾ハ短小ニシ

テ太ク、脛モ至テ短ク、全体長キ刺毛ヲ被リ、殆ント Felis

*latus, L.*ニ類似スレトモ、其類屬ニ至テハ少差ナキヲ保シ

難シ、而シテ對馬島ハ北外殊域ノ植物ヲ生スルヲ以テ推

考スルニ、動物植物ノ分布ニ關シ、日本全島、及ヒ朝鮮ノ

中間ニ立ツテ、最モ要領ノ地位ヲ占メ、樺太島ニモ亦同様

ノ關係ヲ有セルヤ必然ナリ、又古北冰洋地方ヨリ日本島ニ往來セシ線路ハ、是レノミニ限ラサルカ如クナレモ、未

タ他方ニ於テハ其根據トス可キ明証ヲ得ス、就中南方ノ

線路即チフヒリピン島、及ヒ日本島ノ間ニ在ルモノハ、甚

タ曖昧ニシテ、殊ニ琉球島ノ近傍ハ、海底深濶ニシテ島嶼

ノ岩石モ、自ラ大洋州地ノ性質ヲ有シ、其内ニ生息セル動

物、及ヒ植物モ、全ク異リタルヲ見レハ、是レ必ス適當ノ

線路ニ非ル可シト信ス、

動物及ヒ植物ノ散布ニ關シ、日本及ヒ琉球諸島ヲ二大種

ニ別ツ、

第一 日本島ハ、必ス古北冰洋地方ニ屬ス、

第二 琉球諸島ハ、大洋州地方ニ屬ス、(ドクトル、ド

デルライオン氏ノ實驗ニヨレハ、稍北方ニ位セル

大島、及ヒアマミト雖モ、殆ント同一ナリト云フ)

前ニ述タル猫族ノ欠乏ハ、全ク犬族ノ如キ他ノ跡行獸ノ

増殖セシニヨルナランカ、

犬族中狐屬ハ北冰洋地方ニ住シ、或時ニハ北海ノ諸島中

ニ渡來スル如キ、種類ヲ算入セサルモ、尙ホ四種ノ最モ須

要ナル類屬アリ、

甲種 狼、(Canis hodophylax Temminck, & Schlegel) ハ屢

日本島及ヒ北海道ニ現出シ、凡テ日本帝國中、此種

類ヲ産セサル地ナシ、右ハ千八百八十年ニ出版セ

シ「クリサンツマム」雜誌中ニ、予カ實驗説ヲ載セタ

リ、其大要ハ、(Canis lupus, L.) ト同種類ノ如クナ

レト、其分類ニ至リテハ、差異ナキニ非ス、

乙種 狐、(Canis vulpes or Vulpes vulpes) 此羅甸語ノ名

稱ハ、狐ノ最モ著名ナル一種類ニ附與セシモノナ

リ、且此動物モ狼ノ如ク、日本全島ニ棲息シ、前ニ

記載セシ古北冰洋地方ノ産ト、更ニ異ナルヲナシ、

丙種 狸、(Nyctereutes viverrinus, T. & S.) ハ古北冰洋地方ノ

一ナル、滿州ニ産スル特殊ノ種類ニシテ日本語、或

ハ羅甸語等數多ノ名稱アリ、甚タ錯雜ナレト、學術

上ヨリ見レハ、一種類タルヤ論ヲ待ス、シイボルト

氏日本動物編中ニハ、テンミンダク及ヒシリール

ノ兩氏カ、日本ニモ、印度地方(東洋種)ニ産スル如

キ、種類ヲ産スルヲ説ケリ、是レ予カ甚タ疑フト

コロニシテ(Nyctereutes procyonoides, Gray.) ハ日

本人カ真ニ狸ト稱スルモノナルヤ、予モ其明解ニ

苦メリ、貉ハ(Nyctereutes viverrinus) ナレト、予カ聞

クトコロニヨレハ、夏時ニ捕ヘシモノ、ミヲ、ムジ

ナト呼ブノ習慣ナリト、多分マミ或ハミダヌキハ

殊別ナルモノナラン、唯前ノ兩氏ノ著書中ニ記セ

シハ、鼻端ノ稍短縮セルヲノミニテ、別ニ其大サモ

載セサリシ、此種類ハ北海道ニハ産セスト愚考ス、

以テ前條ニ述タル論説ノ引證トナスヲ得ヘシ、

丁種 犬、(Canis familiaris) 日本ニ産スル犬ハ、多ク人

類ニ馴養サレテ、半ハ野獸ノ性アリ、家猫及ヒ佛林

狗(支那犬ノ一種)ハ、必ス人爲ヲ以テ他邦ヨリ、輸入

シタルヲ明カナレト、家畜馴養ノ性ニ至テハ、本邦

ニ生シタル、犬種ニ、遙カ優等ナルハ、實ニ奇異ト云

フ可シ、北海道ニモ、同種ノ犬ヲ産スルナランカ、必

ス北冰洋地産ノモノト類似スルトコロアラン、

跛行獸中、鼬鼠屬マステリダハバツヂヤア、黃鼬、水獺、マーテン等ニシ

テ内地ニ甚タ繁殖ス、北海道ノ所産ハ、日本諸島ニ産スル

モノトハ、必ス差異アラン、而シテ予カ了知スルトコロニ
 ヨレハ、内地ニ産セスシテ、古北冰洋地方ノ種類ニ属スル
 モノ三種ヨリ勘ラサル可シ、即チ (*Mustela erminea* L.) (*Mu-*
stela vulgana L.) (*Mustelaz ibellina*
 「ウ#ズル、ストー」トセーブル等)ノ如

シ、又熊羆族中ニモ、殆ント同一ノ關係ヲ有セリ、前ニ陳述
 セシ種属中北海道ニ産セル黃鼬、及ヒウ#ズルハ、古北冰洋
 地方ノモノト異ナルヲナシ、然ントモセーブルニ至テハ、
 テンミンダグ及ヒシリール兩氏ノ説ノ如ク、蝦夷貂即チ
 蝦夷セーブルハ、眞ノセーブルト其分類ハ、少シ々違フト
 コロアリ、自ラ區別ナキニ非ス而シテ (*Mustela brachyura*)
 ト呼ヒシカ、兩氏ノ説明セル區分法ハ、其性質ニ係リ最モ
 適宜ノモノトナシ難シ、何トナレハ體ノ合格、及ヒ尾ノ大
 サハ、全ク同シクノ皮ノ厚薄及ヒ色澤ハ少差アレヒ、決シ
 テ必用ノモノニアラサレハナリ、
 マーテン及ヒウ#ズルノ他種ハ、通常ノ黃鼬 (*Mustela*
melanks T. & S.)ナリ、此種ハ日本ニ殊別ナル奇異ノ動物ニ
 ノ、嘗テ (*Mustela martes*)ノ名稱ヲ帶ヒシヲアリ、而シテ鼬
 モ此他ノ種類ニシテ、同シク往々誤テ名稱ヲ附與セシモ

ノアリシカ、予モ亦日本ニ來リシ以來、大ニ研究スルトコ
 ロアリ終ニ、(*Mustela lutreola*, L.)ト均一ナルヲ看出セ
 リ、其詳細ハ千八百八十年日本東洋會ノ雜誌ニ載セテ、其
 誤謬ナラサルヲ示セリ、

日本島、及ヒ北海道ニ産スル水獺ハ、グレイ氏コレヲ (*U-*
rsus vulgaris)ニアラズ、少シク差違アル他ノ種類ナルヲ
 主張セシカト、ドクトルマーテン氏ノ説ノ如ク、予ハ大ニ
 反對ニシテ、其同種類タルヲ證明スルヲ得、即チ東西
 半球ノ北冰洋地方ヨリ、蝦夷地方ニ住メル、ヲニツプ (*U-*
rsus marinus, L.)ト呼ブ動物ニ、稍似タルトコロアリ、而
 シテ此等ハ蝦夷人ノ爲メニシバ、獵涉セラル、トアレ
 ヒ、千島近傍ニハ稀少ナリト云フ、
 熊羆族ハ、北冰洋地産ノモノアリ、北方千島蝦夷地方ヲ蹂
 躡スルヲアリ、種類ハ褐熊及ヒ其他一種(予未タ充分ノ觀
 察ヲ遂ル能ス其俗稱詳ナラス)ナリ、褐熊ハ津輕海峡ノ北
 方ニ産シ、他種ハ南方ニノミ生ス、而シテ此些少ナル海峡
 ノ障礙ハ、日本島ノ亞細亞大陸ニ接續セシヲアリシ、關係
 ヲ指示スニ、大ニ肝要ナルモノナリ、何トナレハ熊ノ甲種

ハ、始メ朝鮮ヨリ渡來セシモノナラン、且乙種ハ樺太及アムールノ如キ、滿州北方ノ地ニ在リシヲ疑ナク、終ニ津輕ノ海峽ヲ以テ、互ニ競争ノ防禦トナセシヲ顯然タリ、

蝦夷ノ褐熊ハ (*Ursus ferox*) ニシテ、テンミング及ヒシリ

―ゲルノ二氏ハ、「ユレゴン」ノ種屬ト同様ナルヲ示シ、

能ク (*Ursus arctos*, L.) ニ類似セルヲ説ケリ、又過ル頃蝦

夷ニ産セルモノト、熊羆族中ノ緊要ナル種類即チ (*Ursus*

arctos, L.) ト同様ナルヲ詳明セシ人アリ、猶ホ其他ノ鑒

定ニヨリ、テンミング及ヒシリ―ゲル兩氏カ附セシ、(*Ursus*

thibetanus) ノ名稱ハ決シテ相當ノモノニアラサルヲ

ヲ知ルヲ得、終ニグレイ氏ハ (*Ursus Japonicus*) ト呼ヘリ、

眞ノバツジャアハ、少シク精細ノ探究ヲ要シタレハ、前條

マステリダ中ニ論ゼサリシカ、日本島ニ在ルモノハ、一種

奇怪ノモノニシテ、テンミング及ヒシリ―ゲル氏ハ、(*Me-*

les anakuma) ト呼ヘリ、此種類ハ古北冰洋地方ノ (*Mel-*

taxus, L.) ト全ク異ナリ、其着色ノ斑紋ヲ以テ、充分區別

スルヲ得ルナリ、然レモ甚タ稀ニ生存セルモノニシテ、

小説中往々日本ニバツヂヤルノ産スルヲ載セ、衆庶ヲ

シテ此感ヲ起サシメタルハ、全ク英文ニ翻譯スルニ當リ、狸ヲバツヂヤアトナシタル、譯者ノ粗忽ニ出タルモノナレハ、寧ロ日本種ハバツヂヤアト呼スシテ、狸ト言フヲ以テ善トス、

斯ノ如ク已ニ哺乳動物中、肉食族ノ現出、及ヒ散布ニ就ヒテ論及セシカ、今北冰洋熊、海豹、及ヒ北冰洋狐ヲ除キ、他ヲ十四種トス、即チ

一 山猫 (*Felis*) 類名詳ナラス 對馬

二 狸 (*Nyctereutes viverrinus* T. & S.) 日本國 北海道ヲ除ク

三 狐 (*Vulpes vulpes*, L.) 日本全國

四 狼 (*Canis hodophylax*, T. & S.) 同

五 犬 (,, *familiaris*, L.) 同

六 水獺 (*Lutra vulgaris*, L.) 同

七 セーブル (*Mustela zibellina*, L.) 北海道

八 黃鼬 (,, *melampus*, L.) 日本全國

九 貂 (,, *lutreola*, L.) 同

十 エルミニヤ (,, *erminea*, L.) 北海道

十一 ウーブル (,, *vulgaris*, L.) 同

十二 羆 (Meles anakuma, L.) 日本全國

十三 熊 (Ursus arctos, L.) 北海道

十四 熊 (Ursus Japonicus, Gray.) 日本島 北海道ヲ除ク

此等ハ前條ニ、再度縷述セシ如ク、確ニ日本及ヒ亞細亞大陸ノ接續セシコトヲ知ラシムルヲ得タリ、假令ハ朝鮮及ヒ樺太ヲ以テ、アムール地方ト連續セシムルヲ云フ、此他陸地ノ接續ニツキ、引證トス可キモノナケレハ、之ニ反スルノ説ハアルマジト、自ラ信シテ止マス、

又有蹄族ノ現時ニ生存セルモノ、及ヒ地下ニ埋藏サレ、石ニ化シタル標本等、就中象族ノ化石ヲ以テ、一層此説ヲ確實ニスルハ、甚タ容易ナレトモ、此論題中ニ關係ナキヲ以テ、茲ニ筆ヲ擱キ、他日コレニ論及セントス、

○形質遺傳ト教育ノ關係ヲ論ス 西村 貞

近世著名ノ理學家、形質遺傳ノ説アリ、其眞理ノ如キハ事實ニ徴シ、論理ニ推シ、又疑フヘキニ非サルハ、理學世界ノ認可スル所コシテ、本誌前號中、既ニ之ニ論及スルモノアレハ、吾輩ハ、又更ニ其説ノ何タルヲ辯スルヲ欲セス、唯將ニ此説ノ眞理ノ教育ニ於ケル、關係ノ一斑ヲ示ス所

アテントスルナリ、

夫萬有ノ環象カ、人生ノ機體ニ感應ノ勢力アルコトハ、較々著明ノ事實ニシテ、又更ニ喋々ノ辯ヲ俟タサル所ナリ、而シテ父母、及ヒ其祖先ノ天然健強ノ成分ハ、其子孫ニ混化調合シテ、現出スルモノトス、抑此法ヤ、特ニ外形ノ質ニ於テノミ、然ルニ非ス、吾人心裏ノ脉絡ニ於テモ、亦皆然ラサルハ莫シ、英國ノフランシス、ガルトン佛國ノリボーノ如キハ、最善ク形質遺傳ノ心理ニ涉レル法ヲ討究シタル者ナリ、此等理學家ノ報スル所ニ據レハ、祖先ノ形質遺傳ハ、跡ヲ殘セルコト較著ナリ、而シテ其記述セル、心理上ノ下題ノ如キハ、甚タ趣アリテ、形質遺傳法ノ作用如何ヲ觀ルニ足ルモノアリ、アナクレオン、アリストーフェーナス、コリッシ、グーパル、ダンテ、ドライデン、ミルトン、ムーア、シェイクスピア、シエリー、テニソン等ノ血屬ハ、想像力遺傳ノ顯証ナリ、アラゴ、アリストートル、ベールコン、ベンサム、バッチナン、ダーウキン、フランクリン、ホルシユル、ライブニツ、ワット、等ハ睿智遺傳ノ明証ナリ、ボナパルト、シアレマン、ハンニバル、ナポレオン、シビロ、チュールン等ハ、軍人

ノ遺傳ニ出テシ者ト謂フヘシ

抑教育ハ、要スルニ、常習ノ聚合ニ外ナラス、而ノ其常習

ノ諸部タル、甚タ錯謬多種ナル者ト謂フヘシ、蓋シ教育

ハ吾父母師長ノ教訓ノミヲ以テ成ルモノニ非ス、必スヤ

吾時世ノ道義、状態ニ據リテ、薰陶セラレ、ニ非サルハ莫

キナリ、則チ時下宗教上ノ信向著書、會談等ハ、就中著明

ノ原力ニシテ、吾人ノ腦中ニ、冥々ノ感勢ヲ有シ、吾人ノ感

觸ヲ攪發シ、吾人ノ常習ヲ陶冶スルモノナリ、而シテ善良ノ

常習ハ、改進ヲ利シ、醜惡ノ常習ハ、之ヲ碍ク、故ニワロモン

ハ常習ノ勢力ノ大ナルヲ明言シテ曰ク「兒ヲ卒井ル、宜

シク其履マサル可カラサルノ正道ニ教導スヘシ、

或ル心上ノ性癖ニ、形質遺傳ノ傾勢アルコトハ、又教育上

一緊要ノ問題ニシテ、苟モ之ヲ等閑ニ看過セハ、最良ノ教

育手續ト雖モ、徒勞ニ属セサルヲ得ス、蓋シ吾人ノ心地

ハ、概テ所得ニ出ツヘシト雖モ、其之ヲ得ル所以ノモノ

ハ、又生來ノ素地アルニ基因セスンハアラサルナリ、故ニ

教育ハ、心地ヲ創造スルニ非ス、唯之ヲ變陶スル而已トク

トル、カーペンタル「其心上生理學」ニ謂ヘルヲアリ曰ク、

「技藝ノ何レノ部ニ於テモ、工術ノ上達ヲ得ルノ力ハ、概

テ生來ノ稟性ニ關セリ」ト、形質遺傳ノ教育ニ關係アル、

蓋シ又大ナリト謂フヘシ、之ヲ要スルニ信心ノ家ヨリ、無

宗旨ノ兒ヲ出スコト極メテ鮮ク、無宗旨ノ家ニ、信心ノ兒

ヲ見ルコト、又至リテ稀ナリ、誰カ善範良則ノ中ニ入リテ、

法外ノ兒ヲ索ムル者アル、誰カ強慾非道ノ盜伍ニ、慈心ノ

兒ヲ求ムル者アル、

故ニ教育ハ、善良ナル常習ノ合計ニシテ、文化ノ國民ニ在

リテハ、恰理學的ノ建築ニ出テタル宮殿ニ異ナラズ、而シ

テ其今日ノ成跡ニ達シタルハ、全ク數世ノ辛苦ト、數代ノ

功勞トノ賜ニ非サルハナシ、之ヲ要スルニ、教育能ク吾人

ヲシテ、開明ノ此度ニ達セシメタリト雖モ、然レモ教育ハ、

唯作用ノ機力ニシテ、其作用ハ不羈ノ反動ヲ要スルモノ

ナリ、是レ人生教養ノ基ニシテ、改進ノ以テ因スル所ナリ、

○度量衡說 附貨幣 (前號ノ續) 理學士 鮫島晋述

第六 貨幣

現今民間ニハ、新古二様ノ貨幣併ヒ通用ス、故ニ先古貨幣ノ品目、及ヒ其起由ヲ左ニ志ス、

古來通用スル所ノ貨幣ヲ錢ト謂フ、錢ハ本ト泉ノ字ニ作ル、支那國堯ノ時始テ、此貨幣ヲ鑄造セリ其後、周ノ大公ノ時、泉ヲ改テ錢ト名ツク、當時ノ貨幣ハ、皆無文圓形ニシテ、中心ニ方孔アリ、其後漢ノ半兩、五銖錢、北魏ノ大和五銖等、皆錢面ニ文ヲ題ス、我國ニテハ、上古米ヲ以テ物ヲ買ヒシガ、反正天皇ノ時、今ヲ距ルコト一千四百七十七年木菟宿彌、大前宿彌ノ議ニ從ヒ、始メテ貨幣ヲ造リ、表面ニ馬ヲ畫カク、民用大ニ足ルノ義ヲ以テ、人呼ンテ龍足ト云フ、當時金錢一箇ヲ以テ、銀錢十箇ニ換ヘ、銀錢一箇ヲ以テ、銅錢十箇、銅錢一箇ヲ以テ、米一升ヲ買フト云フ、○續日本紀ヲ案スルニ、文武天皇二年、今ヲ距ルコト一千八百八十六年對馬國ニ於テ金鑛ヲ發見シ、翌年又白銀鑛ヲ發見ス、其歲始メテ鑄錢司ヲ置キ、中臣朝臣意美麻呂ヲ以テ長官トナス、此時已ニ金銀鑛ヲ發見セシト雖モ、其小量ナルヲ以テ、大抵唐土ヨリ輸入スルモノヲ用ユ、其後元明天皇ノ時、今ヲ距ルコト一千七百七十四年武藏國ヨリ銅ヲ獻ス、因テ和銅ト改元ス、是歲七月和銅開珍ノ錢ヲ、近江國ニテ鑄造ス、我國ニテ錢貨ニ文字ヲ題スルハ此時ニ始ル、淳仁天皇二年、今ヲ距ルコト一千二百二十二年又新錢ヲ鑄ル、其金錢ヲ、開基勝寶ト云

ヒ、銀錢ヲ大平元寶、銅錢ヲ萬年通寶ト云フ、其他歷代ノ倭錢二十餘種アリ、方今通用スルモノヲ寬永錢、天保錢、文久錢トス、○中古以來、高價ノ物貨ヲ買フニ、兩、分、銖等金銀ノ斤兩ヲ以テ交換セリ、故ニ大小判、二分金、一分銀、二朱金、一朱銀等ノ貨幣アリ、又銀幾匁ノ稱アリ、近古ノ貨幣ニ小粒、又小玉ト唱ルモノアリ、此貨幣ニ定位ナク、常ニ斤兩ニ從テ交換ス、白銀一枚ハ、丁銀、及銀粒四十三匁ヲ紙包ス、五枚ニ至ルマテハ、一包ニセシモノアリキ、同ク維新前迄用ヒシナリ○大判ヲ金十兩トシ、小判ヲ金一兩トス、兩四分ノ一ヲ、一分ト云ヒ、兩十六分ノ一ヲ、一銖ト云フ又金一兩ヲ、銀六十分トス、現今尙或ハ此制ヲ用ユ、又銀一匁、錢若干文ト定メ、金銀ノ兩替ニ從テ、銀何十匁トスルノ法アリ、各郡大ニ異同アリテ、今之ヲ詳ニセズ、寬永錢ハ明正天皇ノ御宇、寬永十三年、幕府ニテ鑄造セルモノ、寬永通寶ニシテ、其最モ大ナルモノヲ、十文錢ト云ヒ、今之ヲ用ヒ、次ヲ四文錢トス、今ノ青錢ナリ、其最モ小ナルモノヲ、一文、又一錢トス、即チ今ノ十文錢ナリ、○仁孝天皇天保六年幕府ニテ鑄ルモノヲ天保通寶ト云フ、其形楕圓ニシテ、方

孔アリ、價百文ニ通用セリ、今ノ八十文錢ナリ。○文久錢ハ
 文久三年ニ鑄造スル文久永寶、即チ今ノ十五文錢ナリ、當
 時四文ニ通用セリ、○中古以來十百、九六百ノ別アリ、今之
 ス、相傳フ、往昔山崎、大津ニ關門ヲ置キ、京師往來ノ商賈ヲ
 シテ、出入各二文ヲ收メシム、商賈他國ニ至リ、常ニ此九十
 六文ヲ以テ賣買シ、卒ニ全國ノ習慣トナルト、凡テ錢十百
 文ヲ、一貫^清緒ト云ヒ、貫已上ハ、皆大數ヲ用テ之ヲ稱ス、
 新貨幣ハ、維新後政府ノ發行スルモノニシテ、金銀銅ノ三
 種アリ、皆圓形ニシテ、泰西ノ貨幣ニ摸造セシモノナリ、○
 金貨幣ニ五品アリ、二十圓、十圓、五圓、二圓、及ヒ一圓ナリ、
 其表面ニ蟠龍、及ヒ大日本明治何年何圓ノ文字アリ、裏面
 ニ大陽、菊桐紋、菊桐ノ枝、及ヒ日月章ノ旗ヲ標ス、○銀貨幣
 ニ五品アリ、一圓、五十錢、二十錢、十錢、及ヒ五錢ナリ、其表
 面ハ金貨ニ同シ、裏面ハ金貨ノ旗標ヲ省キ、桐紋一ヲ增加
 ス、○銅貨幣ニ四品アリ、二錢、一錢、半錢、及ヒ一厘ナリ、二
 錢、一錢、半錢ノ表裏ハ、銀貨ニ同シ、但シ裏面ニ、何枚換一
 厘ノ表面ハ、菊紋、及ヒ明治何年、千枚換一圓ノ文字アリ、
 裏面ニ一厘ノ文字アリ

新貨幣一錢ハ、古貨ノ百文ニ當ル、其百錢ヲ、一圓トナス、
 錢十分ノ一ヲ一厘、百分ノ一ヲ一毛トス
 新貨ノ制ハ、皆十進ノ法ニシテ、算用大ニ簡便ナレトモ、往
 時ハ兩分、銖等算用甚タ不便ナルヲ以テ、永錢一貫文、一
 兩ノ割ヲ以テ、金銀ヲ計算セリ、永錢ハ近古、支那國ヨリ
 渡來セシ永樂通寶、俗ニ比太^{ト云フ}ニシテ其一貫ヲ以テ、金一兩
 ニ交換セシマアリ、

通用古貨、成分百中ノ比例、開成學校化學
 所試驗ノ平均

品目	銅	錫	鉛
寬永錢二十文	八三、〇七一	僅量	八、二三四
全 十文	六六、八五三	八、三二〇	二三、四一三
天保錢	八一、七二三	八、五〇七	七、七八七
文久錢	八三、七七二	四、八九〇	一〇、七一〇
新貨純粹金銀量千中ノ比例 我國及ヒ英國造 警察試驗ノ平均			
品目	日	英	
金貨五圓	九〇〇、〇六	九〇〇、〇二	
銀貨一圓	九〇〇、三〇	九〇〇、四〇	
同二十錢十錢	八〇〇、二〇	八〇〇、〇〇	

(未完)

批評

○讀韓氏原道

文學士 井上哲次郎

近世學漢文者。尙唐宋八家。尙唐宋八家者。無不以韓氏原道爲曠世之大文字。抑有何所取而然耶。以余觀之。如韓氏原道。則其意雖孔孟。其文雖秦漢。而不足取也。取不足取者。以爲曠世之大文字。則其識見可知也。韓氏曰。仁與義爲定名。道與德爲虛位。故道有君子小人。而德有凶有吉。余謂仁與義雖爲定名。而亦爲虛位。道與德雖爲虛位。而亦爲定名。定名與虛位畢竟無分別。假令仁與義爲定名。道與德爲虛位。仁亦猶道。有君子小人。而義亦猶德。有凶有吉。博愛而無利己之心。則君子之仁非耶。有利己之心而博愛。則小人之仁非耶。爲義盡義。則義之吉者非耶。爲不義盡義。則義之凶者非耶。然則道非其爲虛位。故有君子小人也。德非其爲虛位。故有凶有吉也。韓氏又曰。老子之小仁義。非毀之也。其見者小也。蓋老子知有大於仁義者。故小仁義也。韓氏不知有大於仁義者。故大仁義也。譬猶坐井而觀天。以其所見爲極大。而不知有更大於其所見者也。韓氏又曰。其所謂道。道其所道。非吾所謂道也。其所謂德。德其所德。非吾所謂德也。使老子聞

之。亦將排韓氏曰。其所謂道。道其所道。非吾所謂道也。其所謂德。德其所德。非吾所謂德也。至其信已排他之心。則何以異也。韓氏又曰。凡吾所謂道德云者。合仁與義言之也。天下之公言也。老子之所謂道德云者。去仁與義言之也。一人之私言也。是何言也。老子之所謂道德云者。非去仁與義言之也。若夫大道存焉。則仁義亦在其中。而仁義於大道。猶涓滴於大海也。故老子不屑言仁義耳。何以知之乎。老子有三寶。其一曰慈。慈則仁慈之慈。謂博愛也。則可知老子之所謂道德云者。非去仁與義言之也。韓氏乃爲去仁與義言之。蓋亦偏見耳。假令老子之道德。去仁與義言之。吾猶不以韓氏之論爲然。何者其所謂公言私言。以其所親聞見。謂之公言也。不然。謂之私言也。雖然古今如此久矣。東西如此廣矣。其所未聞見。不知其幾千萬也。然則其所謂公言私言。何以知之乎。假令公言私言。容易可知。一村之公言。非一郡之公言也。一郡之公言。非一國之公言也。一國之公言。非天下之公言也。故韓氏之所謂公言。一國之公言。而非天下之公言也。然而韓氏唯據一國之公言。而斷然決事之是非正邪。雖然若有漢土之外別唱老子之說者。則韓氏之公言不足信也。

裏面一厘ノ文字アリ

(未完)

而况於公言私言不足以證是非正邪乎。蓋豪傑常少。而凡庸常多。故豪傑之言。私言也。凡庸之言。公言也。雖有公言之不出于凡庸者。而非無私言之出于豪傑者也。然則公言私言。非是非正邪之證也。昔者希臘人皆信神異。獨索刺氏非之。遂死于刑。然則韓氏將曰索刺氏之言私言也。故不足信耶。昔者英人知以物換金之為利。而不知以金換物之為利。獨私密氏著書以論之。然則韓氏將曰私密氏之言私言也。故不足信耶。昔者天下之人。皆以為大地平坦。到處皆同。後及闍龍氏起。始說大地之圓。而當時天下之人。皆不信之。然則韓氏將曰闍龍氏之言私言也。故不足信耶。夫真理之始出也。必私言也。若排斥私言。則真理亦不出也。然而韓氏排斥私言。則後世真理之不出于漢土。豈非韓氏之過耶。嗚呼韓氏誤矣。公言私言。非是非正邪之證也。吾雖非左祖老子。而亦知老子之不可由此而排也。難者或曰。公言之可信。常也。公言之不可信。非常也。以非常害常。孰若以常害非常。故公言雖不必可信。而勝於信私言之危也。此言稍近于理而未至也。何者。以非常害常。固不若以常害非常。然以常害非常。孰若以常不害非常。是故吾非韓氏以老子之言為私言而排斥。

之也。且夫對照孔老二氏之學。其旨意亦往往相符合焉。孔子曰。予欲無言。天何言哉。四時行焉。百物生焉。天何言哉。老子亦曰。聖人處無為之事。行不言之教。萬物作焉而不辭。生而不有。為而不恃。功成而不居。由此觀之。共欲無言也。孔子曰。其未得之也。患得之。既得之。患失之。老子亦曰。寵辱若驚。患大患若身。何謂寵辱。辱為下。得之若驚。失之若驚。由此觀之。共歎得失之煩人也。孔子曰。朝聞道。夕死可矣。老子亦曰。死而不亡者壽。由此觀之。共深志于其道也。孔子曰。君子無所爭。老子亦曰。上善若水。水善利萬物而不爭。夫惟不爭。故無尤。由此觀之。共不欲與人相爭也。孔子曰。吾道一以貫之。老子亦曰。聖人抱一。為天下式。由此觀之。共尚一也。孔子曰。賤貨。老子亦曰。不貴難得之貨。由此觀之。共賤金錢也。孔子曰。無為而治者。其舜也歟。夫何為哉。恭己正南面而已矣。老子亦曰。聖人云。我無為而民自化。由此觀之。共感無為之妙也。孔子曰。歲寒然後知松柏之後凋也。老子亦曰。六親不和。有孝慈。國家昏亂。有忠臣。由此觀之。共言君子之表節也。故曰。其學之旨意。亦往往相符合焉。雖然孔老二氏之學。不必相同。雖不必相同。而非如韓氏之排老子之。

甚也。韓氏又排佛氏曰。欲治其心。而外天下國家。韓氏之排佛氏。何其妄也。夫有法能起摩訶衍信根。是故佛氏說法。令一切衆生。始成世善。終成出世。雖似外天下國家。而始成世善。與孔子之道。何以異也。且夫佛氏以一切衆生。爲平等無二。是與泰西所謂同等之權。其義稍相近矣。然則佛氏豈外天下國家哉。韓氏又曰。甚矣。人好怪也。不求其端。不訊其末。惟怪之欲聞。凡人有好怪之性。故從而導之。則其智發達。其學開進。若使好怪之性不得展舒。則文明之基絕矣。開化之源盡矣。故吾喜人好怪也。而各自亦當喜人好怪也。獨韓氏惡人進于文明趨于開化耶。何爲惡人好怪也。韓氏又曰。孟氏醇乎醇者也。荀與揚。大醇而小疵。此言即有小疵。何者。荀與揚。雖固有小疵。而孟氏亦非無小疵。故古來有非孟之說。如荀卿非十二子。如王充刺孟。如司馬光疑孟。如晁以道詆孟。如黃次伋評孟。皆非孟氏。是其有小疵故也。無小疵則非孟之說。豈其如此盛也哉。韓氏又曰。明先王之道以道之。鰥寡孤獨廢疾者有養也。由此觀之。韓氏之所謂道德云者。在使鰥寡孤獨廢疾者有養也。是雖似仁者之道。而不必然也。試察人民。人民分爲二種。

曰生產者。曰耗產者。耗產者。又分爲二種。曰耗產而資以爲益者。曰耗產而后全不爲益者。若夫廢疾者。耗產而后全不爲益者也。然而使其有養則仁矣。雖然獨仁于廢疾者耳。不仁于生產者也。抑生產者之所得。則生產者當自取也。而生產者之所取。則有益于生產也。若奪生產者之所得。授之耗產而后不爲益者。是不啻妨生產之道。又不報生產者之勞也。其不仁果如何也。言及此。有人必曰。凡失者壯強。而得者孱弱。則得者之喜甚於失者之悲。故奪生產者之所得。授之耗產而后全不爲益者。則由此而生之悲。不及由此而生之喜也。嗚呼。是知二五。而未知十之言也。生喜則生喜矣。然而後來妨生產之害。雖不彰著。而其實不渺渺也。故曰。是雖似仁者之道。而不必然也。一要之。韓氏原道。通篇支離而無理。矛盾而不通。不通無理。可謂之曠世之大文字耶。近世學漢文者。何故籍籍稱之也。吾久歎學漢文者無識見。而居于陳迹。不能駕古人而上也。乃摘發韓氏原道之謬誤。使其知以前人之不及後人。後人之不復及後人。

文中批点圈点ヲ施シタル所以ノモノハ專ラ讀者ヲシテ
氏カ意ノアルトコロヲ知ラシメ併セテ樞要ノ点ヲ指示
セントスルニアルノミ乞フ諒セヨ 編者識

○非時事小言論

上田秀成 稿

第四章 財政論 並 總結論

時事小言第五編ノ編首ニ曰、近年世上ニ財政困難ノ談アリ、財政果シテ困難ニシテ、且今後コレヲ救フノ道モナクバ、政權國權ノ事モ、畢竟無用ノ論ナレトモ、其果シテ困難ナルヤ、否ニ就テハ、容易ニ判斷ヲ下タス可ラス、ト此說ハ正シク、前說ト矛盾セシモノト云フ可シ、乞フコレヲ証セン、第四編ニ曰、今我國ニ於テ、兵備ヲ改良スルト否トノ問題ハ、之ヲ人民ノ資力如何ニ謀ラス、其國ヲ護ルノ熱心如何ノ一點ニ糾ス可キノミト、明言セラレタルニアラスヤ、夫レ然リ、國權ヲ皇張スルニ必要ナル兵備ハ、資力ニ關セサルモノナラハ、縱ヒ日本國ノ財政ハ困難ナルモ、コレヲ爲スヲ得ベキニアラスヤ、況ンヤ氏ハ日本國ノ財政ハ、困難ニアラスト云ハル、ニ於テオヤ、況ンヤ強兵ナルキハ、國ノ繁昌モ期シ得ヘシ、ト論セラレ、ニ於テオヤ、然ルヲ今ニシテ、此ノ言ヲ發セラレ、ハ、コレヲ前後矛盾セシ說ト云ハス、又何トカ云ハン、氏マタ曰「抑モ今ノ財政困難ト云フ、其財政ハ日本國ノ財政カ、日本政府ノ財政カ、先ツ

之ヲ區別セサル可カラズ、日本國ノ財政ナラバ、我輩毫モ其困難ナルヲ見ス、假令ヒ之ヲ、困難ナリトスルモ、今ト昔トヲ比較スレバ、困難ノ度ヲ減シタリト云ハサルヲ得ス、困難ノ度ヲ減スルハ、即チ豊ナルノ度ヲ増シタルコトニシテ、今ハ財政豊ナリト云フ可シ、廢藩置縣以來、農家ノ貢稅ハ、大ニ減シテ、次テ又地租改正ノ寬典ニ逢ヒ、又コレニ加ルニ、川場、宿驛等ノ課役ヲモ免除セラレ、御用道中ノ煩ハシキ者モナク、民間ノ安樂、古來未曾有ト云フ可シ、ト農家減稅以下ハ、實ニ氏カ言ノ如シ、然レモ商賈ハ新ナル課稅ニ逢フテ、難澁ヲナスモノナシトセズ、無慮一億萬圓餘ノ金銀貨ハ、海外ニ飛去リ、コレニ換フルニ、一億四千萬圓餘ノ紙幣ヲ以テシタレ、(此一因ノミニハ、アラサルニモセヨ)爲メニ物價ノ騰貴ヲ來シ、商業社會ノ在様ハ、決シテ豊ナリト云フ可カラサルナリ、尤モ一億萬圓餘ノ金銀貨カ、海外ニ飛去セシトスルモ、コレニ對スル物貨ガ我國ニ來リ、公私ノ便利ヲ増シ、多少社會ノ在様ヲ改良シタルニ相違ナケレハ、固ヨリ當然ノコトナリトスルモ、墨西哥ノ如キ、非常莫大ノ金銀坑ニ富メル、邦國ヲ除ク外ハ、如何ニ多

ク祖先傳來ノ正金アルモ、年々ニ輸出入ノ不平均ヲ生セ
 ハ、久シカラスシテ、如何トモス可カラサルニ至ルハ、又當
 然ノ理ナリト云フ可シ、然ラハ今日ハ、其孰レノ点ニアル
 カ思ハサル可カラサルナリ、

氏マタ曰、「日本國ハ、今日尙未タ富マスト云フモ、伊國ノ例
 ニモ倣ハサルハ、國力ニ不相當ナリト云ハサルヲ得ス、而
 シテ現ニ今日、コレニ倣フ能ハサルノミナラス、其四分
 ノ一ニモ及ハサルハ、畢竟我政府ノ財政困難ナリ。」ト云ヒ
 「政府ノ財政困難ナリト云フモ、國民ノ熱心ヲ以テスレハ、
 之ヲ救フ、決シテ難キニ非ス、既ニ熱心アリ、唯今後ノ要
 ハ、全國資力ノ源ヲ深クシテ此熱心ニ附スルニ、實物ヲ以
 テセンガ爲ニ、殖産ノ道ヲ開クノ一法アルノミ。」トテ漸ク
 前説ヲ棄テ、富國強兵ノ順路ヲ踏マントセラル、モノ、
 如シ、コレ予カ前ニ記セシ如キ、事實アレバ、氏カ奪畧主義、
 否ナ權道説モ、今ハコレヲ行フニヨシナキヲ以テ、知ラス
 識ラス、斯クハ論セラレタルニヨルナランカ、若シ氏カ以
 上ニ記ス所ノモノ果シテ違フナクハ方今我日本國民ノ
 財政ハ、決シテ困難ナラス、殖産ノ道モ、次第ニ其區域ヲ廣

クシテ、前途ノ望ニ乏シカラザルナリ。」ト云ハレシ如クナ
 ラハ、其豊ナル財ヲ、政府ニ輸シテ、政府ノ困難ヲ救ヒ、且兵
 備ヲ嚴ニシ、國威ヲ輝カシテ、條約改正ヲ終リ、貿易ヲ盛ニ
 シ、彌前途ノ望ヲ添エテ然ルヘキニ我政府ニ於テ、財政困
 難ナルカ故ナリ。」ト言フニ止メテ、又權道説ヲ主張セラレ
 サルハ、以テ正道ノ、其光ヲ失ハサルヲヲ証スルニ足ル可
 シ

以上ニ於テ、強兵、富國説ノ行ハル可カラサルヲハ、畧明了
 ナル可ケレハ、今ハ富源ヲ大ニスルヲニ説及ホサント、欲
 スト雖モ、此ハ自ラ別題ニ属シ、本論ノ主旨ニアラサレハ
 コレヲ他日ニ譲リ、暫ク茲ニ筆ヲ擱ス、
 (畢)

雜 錄

○キングスレー作悲歌一、山外山正一 譯

無常と告ぐる入相の、鐘の音かねとるたそぐれに、三人の漁夫
 の帆と上げて、入る日と指して西方に走、らと船の進めと
 も、妻子の爲に引さるゝ、心の中ハ皆同し、父の出船と眺め
 つゝ、おきに向ひてぞめる、童子の外に餘念あし、まうけの

薄く子澤山、雨の降る日も風の夜も、洲に打よそる浪の音の、最ととさましき其折も、うせがにやからぬ男の身、袖のひぬのひ女子の身

三人の漁夫の妻三人、日も西山に入相の、鐘もほのうに聞ゆれば、共に籠りし燈臺の、火と挑んと立寄て、摘める心の夫思ひ、窓の戸開けて眺むれば、驟雨にわかあめやら暴風はやてやら、空打過くるむら雲の、色黒々と物をこし、はやてのいりに吹けんとて、水みづうさの如何に増せんとて、洲に打よそる浪の音の、如何程とこく聞けばとて、うせがにやからぬ男の身、袖のひぬのひ女子の身

朝日うよく砂磯さかいそに、潮引き去りて其跡に、残るの三つの死屍を、三人の漁夫の妻三人、歸へらぬ旅に門出して、歸へらぬ夫のさきうらに、髪振り亂し取りとがり、消る斗に啼き入りて、目も當てられぬ風情あり、うせがにやからぬ男の身、袖のひぬのひ女子の身、一日も早く世と去らぬ、一と日も早く樂とせん、屍の跡の砂磯に、寄せ來る浪のくだけつゝ、鳴りささや鳴れよゑとまよ、

○紀特模斯的涅士事 仍獨逸書譯 内田周平郵寄

往古希臘羅馬之盛也。文學技藝。鬱然隆興。碩學鴻儒。前後輩出。各自立言成家。其登場而逞辨者。世稱曰演說家。而特模斯的涅士實爲其巨擘焉。特模斯的涅士者希臘人也。父某主造兵場。特模七歲喪父。遺資盡爲保傅所私収。而性脆弱善病。在鍊躰鬯。不久而去。以故儕輩嘲笑。目以諸般譚名。年十六。聽碩學加里斯カリス篤羅都士ドラス辨析雅典帝辨之紛爭。大愕其雄壯。且睹衆人喝采。贊歎不已。圍擁而歸。奮然立志。欲精究其術。於是謝絕百事。研究希臘先儒書。又聽伯拉多プラト講說。或入伊查烏士門イサウ。日夜苦學。專精於演說。既而年稍長。其技粗熟。乃欲試之於稠人中。一日上場演說焉。聽者大笑。吹唇成聲。特模失望而歸。有一友激之。乃更構意。講習數日。復登場。復爲所笑。外套掩面。悄然走歸。其友俳優サツルス之。特模曰。吾用全力於演說。有年于茲。而衆人弗贊。反喜不學無術之說矣。差都留士曰。誠如子言。然子之所以得之者有三焉。曰。呼吸繁促。音吐不洪。是由胸膈之弱歟。曰。口舌澁晦。句節不明。是由一二舌音有不爽乎口歟。曰。每演訖一句。輒乃聳肩。其態醜矣。特模聞之。有所大悟。於是登高臨海。日立于空氣清爽。洪濤澎湃之間。勵聲高誦。以強其胸膈。置石

粒于舌下。而發其難音。以漸習熟之。又以劍掛其肩上。每發輒觸傷之。以變其醜態。矯揉刻勵。無所不至。又搆地室。懸大鏡而對之。照其變顏掉頭舉手頓足之狀。又自禁其足。故髡隻鬚閉戶獨居。覃思勵精。夙夜習鍊。如是者數月。復登場。於是聲音宏亮。態度整飾。昂低折旋。無不諧其節。衆喝采拍掌。其聲撼堂焉。特模自茲愈奮勵。聲價籍甚。震動一世。後來以演說名家者。皆學其口吻。而遂無出其右者云。

譯史氏曰。西人有言。曰。涓滴不輟。岩石穿穴。又曰。伐之伐之。巨柏仆地。謂勤力之能成其志也。特模者何人。非子然之麼。一孤兒哉。困心衡慮。百事艱難。而悍然不挫。確乎不變。終能爲當世岱斗焉。嗟夫世之自棄自畫。不盡其精力。而諉諸天稟之偏者。觀於特模之事。其亦知所奮起哉。

井上巽軒曰。字々活動使讀者感起。

川田一瓢曰。叙特模苦學之狀。累々數十言。而無一閑筆。是勞力處。

又曰。寫得情態。宛然如見。是馬遷骨法。

○月洲先生詩鈔

似岩溪生

百事何時得如意。居貧如客是良策。縱令百事渾如意。未免乾坤一過客。

井上巽軒曰。一結。哲學家之所翹味。

雪日講魯論于藤波公邸。途中自感。賦呈。

著脚難行爛銀界。鼓唇易說圓珠經。請看踐履尤多處。大道一條平似硯。

寄書

○思想ノ獨立

金城居士

抑我思想ノ外人ニ左右セラル、其來ルヤ遠シ、コレヲ史ニ徵スルニ、中古ノ開化タル皆其源ヲ支那、朝鮮ニ發シ、制度、文物、學術、技藝ニ至ルマテ、隋唐、高麗ノ模造物タルニ外ナラサルノミナラス、史ノ載スル所ノ事ト云ヒ、其編纂ノ法ト云ヒ、多ク支那ノ史書ニ倣ヒシモノナリ、我制法ノ基トモ稱スル、上宮太子ノ憲法十七ヶ條ノ如キ、專ラ佛法ニ依リ、勸戒飭令ノ語ヲ集メシモノニ過キサルナリ、下テ泰時、尊氏ノ貞永式目、建武式目ヲ定ムルニ當テヤ、大ニ憲法ニ依リシ所アリ、又彼ノ我寶典トモ稱ス可キ、大

寶令ノ如キハ、隋唐ノ法令ヲ寫セルモノニ過キサレハ、遂ニ王朝ノ制度、觀ルニ足ルモノナシトマテニ言ハシムルニ至レリ、其他書ニ、畫ニ、宮室ニ、衣服ニ、音樂ニ、其支那、朝鮮ニ採レルモノ枚舉ニ違アラス、此等ノモノハ皆ナ外形ノ事ニ止マレ、其無形ノ思想ニ於テモ、亦同シク然ルヲ知ルナリ、應神帝ノ朝ニ王仁ナル者、來テ論語、千字文ヲ獻シタル時ニ當テヤ、其之ヲ修ル人ハ、曉星ヨリモ稀レナリシモ、月遷リ歲變ルニ從テ、孔、孟ノ學ハ漸ク國中ニ傳播シ、遂ニ君臣、父子、夫婦、兄弟、皆其義ヲ守リ、其道ヲ行ヒ、上下貴賤ノ別、自ラ定リ、各其分ニ安シ、社會ノ秩序、自ラ整然トシテ見ル可キモノアリキ、然レモ利ノアル所ハ、害ノ因テ以テ生スル所ニシテ、孔、孟ノ我カ國ニ害ヲナセシコト少クナラス、此レ孔、孟ノ罪ニ非ルナリ、其之ヲ學フ者ノ過ナリ、政治タリ、世事タリ、道德タリ、皆議論ノ湧出スル時ハ、經書ヲ繙テ、決テ孔、孟ニ仰クヲ常トセリ、孔、孟可ト言ヘハ、即チ可、否ト言ヘハ、則チ否、一ニ孔、孟ヲ以テ議論ノ規矩トセリ、而シテ人疑フ其ノ間ニ容ル可キハ、夢ニタモ見サル所ニシテ、毫モ爭ハサリシ所ナリ、

泰西ノ學一たび我國ニ入リシ以來、思想初テ獨立スルヲ得、人初テ己ノ腦力ノ神妙ナルヲ悟リ、己ニ孔、孟ノ教ヲ引テ、事ヲ論セズ、飽クマテ其是非曲直ヲ辨シ、少モ躊躇セズ、勢此ニ至リシカハ、其極遂ニ此ニマレ、彼ニマレ、孔、孟ノ教ト言ヘハ、皆迂遠陳腐トシテ、之ヲ排斥シ、儒者ヲ目シテ、活字引ト看做スニ至リ、誦樂其聲ヲ潛メ、蟹語ノ音四方ニ起レルヲ見レハ、實ニ思想ノ風潮、コトニ一變シタルヲ見ルニ足ル可シ、然レモ深窓ニ養ハレ、纖手ニ育テラレテ、人トナリタル者ハ、自ラ己ヲ修ルヲ能ハスシテ、遂ニ遺產ヲモ失スルニ至リ、又專政ノ中ニ沐浴シタル人、民ハ、縱ヒ其壓制ヲ脱スルモ、一時ハ自ラ治ムルヲ能ハスシテ、復干涉政府ノ下ニアラスンハ、立ツヲ能ハサルカ如ク、我思想モ之ニ均シク、一度孔、孟ノ懷ヲ離レシモ、自ラ獨歩スルヲ能ハスシテ、西哲ノ壓抑ヲ受クルニ至レリ、豈ニ慨嘆ノ至リニ非スヤ、業ニ己ニ孔、孟ヲ以テ、理ノ標準トハセサレ、ミル、バツクル、スペンサーヲ以テ、議論ノ準繩トナスニ至リ、最多最大ノ幸福ハ、人生ノ目的ナリト、曰クスペンサー之ヲ揚

言スレハナリ、國運ノ盛衰ハ、風土寒暖ニ因ルモノナリト、曰クバツクル之ヲ説ケバナリ、男女同權タル可シト、曰クミル之ヲ唱フレハナリ、以爲ク此ノ如クシハ、コレ人類ニ非スシテ鷓鴣ナリ、世人ノ論實ニコ、ニ止マリ、將ニ一步ヲ進メテ、西哲ノ論ノ首尾相ヒ通スルモノナルカ、將タ理ニ合スルモノナルカヲ窮ムルカ如キハ、之ヲ爲サ、ルハ、長嘆息ノ至リト謂フヘシ、論シテ此ニ至レハ、歐洲思想變遷ノ大勢、余カ腦中ニ泛ヒ、其相比シキヲ感ス、歐洲復古ノ前ニ當テヤ、言論皆耶蘇法師ノ制スル所タリシカ、一度ヒ大古ノ開明ニ歸スルニ際シテハ、法師ノ言フ所ハ、之ヲ遠ケ、孜々トシテ希臘ノ學ヲ攻ムルニ至リ、其極遂ニ希臘學者ノ、奴隷トナリシナリ、然レモ思想其者ノ如キ、至大至高ニシテ鬼神モ之ヲ避クル程ノ者ナレハ、奚ソ久シク人ノ奴隷タランヤ、幾時モナクシテ、歐洲西南ノ方ニ當リ、赫々タル巨星顯出シ、光輝三千世界ヲ照シ、爲メニ人皆囹圄ノ暗キヲ覺ヘ、其之ヲ出ルノ道ヲ探クルヲ得タリ、嗚呼我東洋ニデカルト出テ、言論其光輝ヲ受ケ、

以テ孔、孟西哲ノ獄ヲ脱シ、自ラ其意ノ向フ所ニ馳驅スルハコレ、果シテ何レノ日ヅヤ、或者曰、白人ト黃人ハ、自ラ異ナル所アリ、デカルト、ヘーゲルモ、歐洲ニコソ生レタレ、日本ノ如キ國ニ於テハ、縦デカルト、ヘーゲルヲ、能ク眞似スル者ノ輩出スルアリトモ、必スヤデカルト、ヘーゲルト肩ヲ並フ可キ人ハ出サル可シ、是レ日本古來ノ史ニ徴シテ瞭然タリト、旣往ヲ以テ已然ヲ推論スルハ、論理ノ法ニ適フト言フ可ラス、左リナカラ、今一步ヲ論者ニ讓リ、デカルト、ヘーゲル其人ノ如キ、哲人ノ我國ニ輩出セサリシ所以ヲ述ヘ、以テ論者ノ迷霧ヲ散シ、余カ意見ノアル所ヲ示サントス、叛亂私闘踵ヲ接シテ起リ、刀矢地ニ動キ、旗幟天ヲ覆ヒ、干戈止ム時ナク、寧日殆ント無リシハ、コレ我中世ノ大勢ナリ、此ノ如キ荒蕪ノ地ニ於テ、奚ソ一家ヲ作シ、整々堂々ト、西哲ト相對スル程ノ、學者ノ輩出スルノ理アラシヤ、食足りテ禮ヲ知り、暇アリテ學ニ就ク、是レ天下ノ通理ナリ、家康起テ天下ヲ蕩平シ、民再ヒ平和ノ氣ヲ吸ヒ、恩澤ニ沐浴スルヲ得タリ、是ヲ以テ道春、徂徠等ノ鴻儒續々出タ

リ、左レト其論、概テ諸子百家ノ説ヲ祖述セシニ過キサル
 ノミ、又天下ヲ匡濟セシ強手ヲ以テ、大ニ言論ノ自由ヲ阻
 遮セリ、要スルニ徳川氏ノ世モ、思想ノ獨立ヲ養成ス可キ
 時ニ非サリキ、然レモ言論ノ自由一タヒ振起シ、思想首械
 ヲ脱スルニ於テハ、我思想ノ純乎タル、國論ヲ帶ルニ至ル
 ヤ明ケシ、然リ而シテ其之ヲ見ルハ遠キニ非ル可シ、聖
 天子幸ニ上ニイマシ、良相之ヲ輔佐シ、干戈起ラス、彈丸
 響カス、實ニ千歳一遇ノ時ナリ、我學生ノ如キモ、書室ニ
 沈坐シ、螢雪ノ勞ニ就クコトヲ得、朝ニ西洋ノ學海ヲアサ
 リ、夕ニ東洋ノ寶山ニ入り、希臘ニマレ、羅馬ニマレ、獨ニ
 マレ、英ニマレ、佛ニマレ、皆其學ヲ攻メ、六藝諸子百家ノ
 書ヲ講シ、且ツ皇國ノ文物、制度ヲ考究スルニ難ラス、嗚
 呼實ニ得難キノ時ナリ、是レ我學生ノ專有スル所、白哲人
 種ノ羨望スル所ナリ、
 夫レ我學生ヲ外ニシテ、誰カ思想ヲ剏造シ、一家ノ學ヲ作
 シ、名ヲ海外ニ傳ヘ、千載ノ下ニ芳ハシカラシムルコトヲ得
 可キヤ、余之ヲ見サルナリ、學生勉メヨヤ學生ノ任實ニ重
 且大ナル此ノ如シ、學生勉メヨヤ、歷山王歐土ヲ蹂躪シ、

天下ニ羈タリシモ、如何セン空蟬ノ悲シサニハ、其勢威人
 ト共ニ、一朝ノ露ト化シ去レリ、之ニ反シテ、釋迦、孔子、
 耶蘇、アリストーリートルノ如キハ、世ニ容レラレサリシカ
 ト、能ク千載ノ下ニ、人心ヲ籠絡スルヲ得タリ、學生此二
 者ノ別ヲ辨シ、己ノ去就ヲ決シ、乞フ勉メヨヤ、

雜報

○先頃、獨逸人ライン、氏石川縣下加賀國手取川近傍に露
 出せる、舍爾質砂石中に含有せる木葉石と採集し、歸國の
 後、ガイラル氏に托し、其點檢を請ひ、地質時代珠羅系統
 に属せる、特種の化石たることと發見し、始めて本邦に、其
 時期の巖石と出土地と了知するに至りしが、昨夏東京大
 學地質學生横山又二郎氏、實地經驗の爲め、和歌山縣下紀
 伊國に遊び、有田郡湯淺驛字水谷の海濱ある砂石中に於
 て、夥多の木葉石と採掘し、點檢せられしに手取川に産す
 るものと同様に於て、左の數種を認め、

羊齒料

蘇鉄料

アデヤンタイト

ポドザマイテス

同
スフエノプテリス
同
ベコプテリス
同
プロロフイム

同
アノモザマイツ
同
ザマイツ

其地も必き、同時期に屬するからん、左に列の本邦に珠羅系統の存在せる、第二の地位と發見せしめ、地質學家の爲め、祝賀すべきことにこそ、

○富士山の巖石と理學士肥田密三氏が分析せられたる性分表と得られの左に掲ぐ

硅酸	四九、七七	石灰	一〇、〇七
礬土	二〇、五七	苦土	五、〇〇
第一酸化鉄	六、〇六	曹達	一、〇八
第二酸化鉄	五、一一	剝布斯	〇、八四
酸化滿俺	〇、二〇	磷酸	〇、一六
水分	〇、七三		

○勢州三重郡千草村に一城跡あり、土人の口碑によれば天正年間、北勢の豪族某が居城たりしが、瀧川一益の爲めに、滅せられたりと、今其所と見るに、城跡の一小阜と占めて、甚だ高うらさ、土中焦米石あるものと出と其中米麥蕎

麥等の化石の如きあり、然れとも此の眞の化石にあらざして、該城焼失の際、備荒の糧米焼けて、唯炭素と餘りもの土中に埋もれて、今日まで酸化と免られたるものなるべし、○東京大學三學部の學生諸氏の、夜間に各専門の學と究索せんが爲め、數年前より成寅社、潛洲會、興話會、共話會、三共社、十三社といふ會と設け、専ら學術上の演説、討論と勉めらるる由、今日學術隆盛の際、世人に傍聽と許されたらんに、其益甚かりらざるべし、

○東京名家墳墓表（前號の續）

山鹿素行、兵	牛込宗參寺	新井白石、儒	淺草本願寺中
青木昆陽、儒	目黒瀧泉寺	山東京傳、戲	圓照寺
佐藤信淵、農學	淺草松應寺	佐藤一齋、儒	兩國回向院
北村季吟、歌	池之端七軒町	麻布深廣寺	
木村高敦、	高輪泉岳寺	曲亭馬琴、戲	千束村
其角、俳諧	芝二本榎	上行寺	蜀山人句
平賀鳩溪醫	橋場總泉寺	關新助、數	牛込法輪寺
杉田元伯、醫	愛宕下天德寺		

（畢）

○理學士寺尾壽君の、兼て佛國に留學し居られたるが、本年金星の太陽と經過すると觀察せんが爲め、亞米利加へ赴むるよし

○去る七日の上野教育博物館に於て、東京化學會の年會と開られ、會長理學博士松井直吉君の原子論、理學博士久原躬弦君の有機化學の講究、文部大書記官辻新次君の日本化學の始等、夫々演説あり頗ふる盛會ありし由、

○勢州に有名なる筆捨山の、古より其景色の絶美あると贊せざる者のありしが、此の全く花崗石の腐爛して、所々に未だ全く崩壊せざる岩塊の、柱状と作て露出するに因る者とも、亦其一斑の、石間に繁茂せる森林の、青々たるに原因せる由かれとも、近來盛に伐木して、大に其景と失ふに至りしに、誠に惜むべきとあり、

○東京大學教授岩佐巖君の豊後國大野郡鷺谷村字若山のシローム鉄鑛中より、二種の新鑛石と發見せられたるよし、其委細の三學部發行の、學藝志林に載せらるる筈ありと、猶ほ右鑛石と持歸らん爲めに、同地へ出張せらるる人もあるよしに付、再ひ其模様と聞て報道とべし、

○去る十六日錦窠伊藤圭介先生の賀筵に陳列せられし、諸品の圖説と編輯し、錦窠翁耄筵誌と題し、其第一卷の令孫同苗篤太郎氏の編輯にて、既に發兌せられり、

○近江國大津の水原隼三郎氏の、近頃加減の對數と發明せられたり、又同氏の嘗て心と凝らし、いと簡便なる日時計と創製せられしと云ふ、其れと云ひ、之と云ひ、まこと好みをべきのことあり、

○讚岐國高松に於て、有名なる神保直吉氏の、兵學と江川太郎左衛門翁に受け、高松に於て、西洋流の嚆矢たり、今齡六十有餘、日夜新機の創製に、心と用ひ、既に圖畫面積測量器械、轉輪製器械、其他有用の器械と、製せられたること、甚た多し、又氏の、數年前より、何にり、一大創製に心と潛め、頻りに工風し居らるる由あるが、同氏の見込にて、到底其一代にて、此考と完ふとべうらざるべしとのとあり

頁生是五藝雜誌七第

明治十五年五月廿五日發兌

者又羅馬字ノ便ナルヲ確知シ、之ヲ實地ニ用フルニ方リ